トーマス・ミュンツァーと「神の国」

木　塚　隆　志

はじめに

トーマス・ミュンツァーは，16世紀，ドイツにおける宗教改革初期の時代において，社会秩序の急進的な変革を要求して活動した説教者として知られる人物である。この意味から，これまでにおいて，ミュンツァーの理解の中心点を成してきたのは，テューリンゲンにおける農民戦争の指導者としての彼の活動であったと言えよう。ここに見られるような過激な社会変革活動のゆえにミュンツァーは，宗教改革の主流であるルターとの対比において，宗教改革の傍流あるいは急進的左翼(1)を代表する人物として位置付けられてきたのであるし，従って，また現在に至るまでのミュンツァー解釈の要は，彼のこの社会変革活動をいかに評価するかという点にあったと言っても過言ではなかろう。

ミュンツァーの社会変革の試みを，二王国論的な立場から厳しく非難するルター及びルター派の神学者達の極めて消極的なミュンツァー理解に対し，19世紀以降，これとは全く反対に，マルクス主義的視角から，ミュンツァーの変革活動を共産主義的な革命の先取りとして積極的に評価する試みが為されてきた。こういった積極的なミュンツァー評価に対して決定的な役割を果たしたのは，勿論，F.Engelsの『ドイツ農民戦争』における初期市民革命論の中でのミュンツァー理解である。(2)ここにおいて，ミュンツァーは－領邦権力を背景とした市民的改革を代表するルターとの対比において－民衆（平民・農民）の側に立つ革命家として積極的に理解されているのである。そして，ミュンツァーの活動を宗教的な次元を越えた合理的な革命思想の実践に還元するF.Engelsのこういったミュンツァー理解は，今日に至るまで，マルクス主義的なミュンツァー研究においてその基調を成していると考えられる。

これに対して，非マルクス主義的な研究においては，ミュンツァーの急進的な社会変革の要求の根源を，彼の終末論的－黙示録的な救済観に求める傾向がその主要な研究視角の一つを成してきたといえよう。今世紀に入ってからの，この視角に基づいた研究でまず注目すべきなのは，H.Boehmer によるものであろう。(3)H.Boehmer はミュンツァーの思想における熱狂主義的－千年王国主義的な特徴に注目し，これが彼をして黙示録的な「殺戮の預言者」にまで追いやったと考えている。また，第二次世界大戦後においても，この様な終末論的－黙示録的な要素への注目は，マルクス主義的なミュンツァー解釈に対する批判

的観点から，非マルクス主義的ミュンツァー研究における潮流の一つを形成してきたのであり，(4)ここでは，マルクス主義的な研究における「社会的革命家・政治的煽動家」としてのミュンツァー像への批判から，「終末論的－黙示録的預言者」としてのミュンツァー像が強調されてきたのである。

ミュンツァーの社会変革活動に対するこの2つの全く相い反する評価は，ミュンツァー解釈の根本的な難しさを露にしていると考えられる。(5)前者は，ここに，宗教的次元を越えた合理的な革命思想を見出だし，後者は，ミュンツァーの活動に対して，黙示録的な終末待望に導かれた熱狂主義的な神学を見出だしているのである。しかし，この様なミュンツァー解釈の難しさは，一つには，彼の歴史変革観の持つ独自の性格に－すなわち，非常に能動的な変革意識を持った終末論に－起因していると考えられる。すなわち，彼の変革思想は，一方では終末的な緊張感に満ちた世俗否定の意識に従いながら，また他方においては古典的な終末観や千年王国論とは異なった能動的な社会変革の確信に導かれており，この点において現実の世俗社会自体の変革へと直接的に係わる方向性を持っているのである。

古典的な終末待望あるいは千年王国論(6)は，歴史内に於ける「神の国」の実現を否定するにせよ，また期待するにせよ，いずれ，終末的な歴史変革を，パルーシア（＝キリスト自身の再臨）といった，人間の歴史に対する神の力の直接的な介入に期待している。すなわち，こういった終末観は，歴史の変革を神の力のこの突発的で劇的な歴史への介入に決定的に依存しているのである。従ってここで人間の行うべき行為は，この「キリスト自身の再臨」という出来事に対する準備として，その受動的な性格において理解されるのである。すなわち，ここでは，神による劇的で，即時的な歴史の完成によって人間がその歴史から突然に引き離されるところに救済が期待されるのであり，従って，古典的な千年王国論の場合には，この歴史の断絶の後に実現される「神の国」は－その実現がこの地上において期待されるにもかかわらず－全く超歴史社会的な性格の下に理解されるのである。

これに対して，ミュンツァーは，変革に際してパルーシアといった神の力の直接的な介入を期待していない。確かに彼は，旧約・新約における黙示文学的・終末論的叙述の解釈にしたがって現在を神の「刈り入れの時」として認識している。(7)しかし，彼は人々の神秘主義的自己変革（あるいは神秘主義的救済）の確信(8)に基づいて，古典的な千年王国論のパルーシアという受動的な信仰を打ち破り，人間自身を主体とする能動的な歴史変革の期待を導いているのである。つまり，彼は，人々が心のうちにおいて，神の救済の業としてのキリストの受肉を，その苦悩と十字架とに倣うことにおいて，自分のものとして繰り返すところ，ここに現在の変革の決定的な基盤を見出だしたのであり，そして，この神秘主義的な救済が，人々の活動(9)によって歴史社会に普遍的に拡大されていくところに「神

の国」を見出だしたのである。すなわち，彼にとって「神の国」は再臨したキリスト自身の支配する楽園的王国ではなく，人々の心の中におけるキリストの支配の拡大過程において　この歴史社会に創造されていくべきものであったわけである。(10)

このように，ミュンツァーは，神の力の劇的な介入によってではなく，人間自身の能動的な歴史変革を通じて歴史社会自体に「神の国」が実現されることを期待したわけであり，この意味において彼の変革観は，古典的な受動的千年王国論に基づく運動に比べ，歴史社会における世俗的な社会関係の変革に，より直接的に係わる性格を持たざるを得ないものであったといえよう。実際にミュンツァーの変革活動は，特にチューリンゲンの農民戦争の中での彼の活動に見られるように，現実の社会的対立の中へと深く係わることになったのである。

しかし，こういった能動的な変革観に基づいてミュンツァーは，来るべき地上の「神の国」を具体的にいかなる社会秩序を持つ歴史社会として考えていたのであろうか。－我々はこの問題を考えるときミュンツァーの変革観の抱える根本的な問題点に直面することになる。（勿論この問題点はいま述べたミュンツァー解釈の困難さと深く係わっている。）これはまた神秘主義的救済観（＝内的変革観）と千年王国的変革観（＝外的変革観）との結合の問題に他ならない訳であるが，以下の考察では，ミュンツァーがその変革思想においてこれら二つの要素の結合の下にいかなる社会秩序を持つ「神の国」を構想したのかという問題について，二人のミュンツァー研究者H. －J. GoertzとR. Schwarzの議論を通じて考察することになる。そして，さらにこのようなミュンツァーの「神の国」についての議論から，また，ミュンツァーの変革思想における根本的な問題点を露にしていきたいと思う。

1．ミュンツァーにおける„Ordnung“観

H. －J. Goertzはミュンツァーの思想全体における神秘主義的思考の圧倒的な主導性を強調する。彼によれば，ミュンツァーの外的変革観，すなわち「終末論的行為を動機付け，導いているのは，まさに神秘主義的過程において経験される救済にほかならず，また，ミュンツァーにおける神秘主義的観念と終末論的－黙示録的観念との結合において，これを導き，鼓舞しているのは神秘主義的救済の教説なのである。」(11)従って，彼はミュンツァーの内的変革観の論理がそのまま外界及びそこでの行為へと延長されたものとしてその外的変革観を理解する。すなわち，彼は，ミュンツァーの内的変革観における［被造物志向（＝心の中の「世俗」）の除去］と［真の信仰の成長］というモチーフがそのまま外化されて導かれる［背神の人々（＝外的「世俗」）の除去］と［「選ばれた人々」の成長］というモチーフにその外的変革の論理を見出だすのである。(12)つまりここではミュンツァーの神秘主義的自己変革における全くの世俗拒否的性格がそのまま外的社会変革でも

徹底されるわけである。

これに対してR. Schwarzは，ミュンツァーの思想における神秘主義の影響を認めながらも，ミュンツァーの「外的秩序（変革）観の全体を，神秘主義（的要素）のみから導くことはできない。」とし，この問題は「中世における千年王国的伝統」の下でこそ最も良く理解され得るとするのである。(13)

さてこのようなミュンツァーの思想における2つの要素とその結合関係に対するこの二人の議論は，一つの歴史社会としての「神の国」の性格及び構造とについての議論に直結していると思われる。従って，ここでまず，以上のような観点から重要であると考えられる問題，すなわち，ミュンツァーにおける „Ordnung“ 概念について，両者の解釈を比較してみたいと思う。

a. H. －J. Goertzの„Ordnung“解釈

ミュンツァーがOrdnungについて語るときそこには2つの用法，あるいは意味があると考えられる。一つは神が聖霊を通じて人間に語り掛けるその根拠となる根源的な秩序であり，神と人間との間に立てられ，両者を神秘主義的救済過程において結び付ける秩序である。(14)これに対し今一つは，神が被造物（と被造物と）の間に立てた秩序である。(15)この場合には，前の神秘主義的救済の根拠としての秩序における神と人間との関係に加えて，人間と他の被造物との関係が問題となってくるわけであり，また，この点において，とりわけミュンツァーの創世記第1章-28 及び，そこからの「原初」の－堕罪以前の－秩序に対する解釈が係わってくるわけである。

さてH. －J. Goertzは(16)ミュンツァーのこの二つの秩序を共に中世神秘主義，とりわけ，『ドイツ神学』の思想的範疇において完全に理解されるものとして考える。(17)すなわち，『ドイツ神学』は本来的に神秘主義的である前者の秩序観のみでなく，後者の創世記第1章-28 に特に係わる秩序観をもその視野に含んでいるというわけである。なるほど「神の秩序を通じて人間に全ての被造物が従属し，仕えている。それは人間が神のみに従属し，仕えるためである。」(18)という『ドイツ神学』の一節は明らかに後者の秩序観に係わるものであるといえよう。ではこのような二つの秩序観は『ドイツ神学』においてはいかなる関係において結び付けられているのであろうか。－『ドイツ神学』は神の救済意志において両者を調和させている。すなわち，「神はあらゆる秩序から自由であるが」自己の意志の実現のために，自分が作り出した秩序に自らを係わらせるのである。(19)つまり神は，秩序を造り，与えるのみではなく，そこに神秘主義的な過程によって自らを係わらせることによって初めてその意志を実現し得るわけである。またこのような両秩序の結合において更に重要な点は，後者の秩序，すなわち，創世記第1章-28 から示されるような，罪によっ

て堕落していない「原初」の神と人間と被造物との間における従属関係は，前者の秩序，すなわち，神秘主義的過程を通じての神の人間への直接的な語り掛けを通じてのみ，人間に正しく認識され，また実現され得るということである。[20]H. －J. Goertzは以上のような『ドイツ神学』における秩序観の両面がともにミュンツァーにおいて受容されたと主張する。従って，ミュンツァーにおいても，後者の秩序（＝外的秩序）は，神秘主義的な救済過程（＝内的秩序）を度外視しては語られ得ないものであり，まさに前者の秩序（＝内的秩序）を通じてのみ人間社会において実現されるものとして考えられるわけである。[21]すなわちH. －J. Goertzによれば「神秘主義的な経験の中で開示される神と人間との一体性こそが『ドイツ神学』にとっては，創世記第１章-28 の秩序の再創造に他ならないのであり」[22]またミュンツァーは，このように「神秘主義の精神にしたがって，人間の外的秩序をその内的秩序から秩序付ける手法」を『ドイツ神学』から受容したのである。[23]

b. R.Schwarzの„Ordnung“解釈

以上のようにH. －J. Goertzがミュンツァーの Ordnung概念を全く『ドイツ神学』の神秘主義的思考の枠組みの中において理解しようとするのに対し，R. Schwarzは[24]ミュンツァーのOrdnung概念の「神秘主義との関係は今まで考えられてきたほどには明瞭でなく」したがってむしろ「この概念についてミュンツァーが考えていることは，彼の千年王国的な思考の範疇に含まれるべき事柄である」[25]と考える。すなわち彼はH. －J. Goertzが神秘主義的救済過程の根拠として特に注目する前者の秩序を，ミュンツァーの思考全体の中で重要なものとして認めながらも，ミュンツァーが「この事を再三語るのは別の文脈においてのことであり，これは，ミュンツァーのOrdnung概念を理解するのに役立たない」[26]と主張し，主に神秘主義的な（内的）秩序とは異る脈絡においてミュンツァーのOrdnung概念を理解すべきであるとするわけである。

さてこういったミュンツァーのOrdnung概念に対する理解をR. Schwarzはミュンツァーの『まやかしの信仰のあからさまなる暴露』における次の一節から導いている。

「私は，我々キリスト教徒よりも，むしろ異教徒やトルコ人やユダヤ人に対して，非常に言葉少なく，神と神の秩序について教え，また神の我々への所有と我々の被造物への所有について教えたい。…というのも，ずるがしこい聖書学者たちは…私が彼等に対し，親密に聖書の始めを指示して，神の我々への所有と我々の被造物への所有を学ぶようにと忠告しても，それを聞こうとも，見ようともしないからである。…それゆえに私は言うのだが，もしあなた方が聖書の始めを正しく学ぼうとしないならば，あなた方は神をも被造物をも（神の名を正しく称えるために）正しく理解し，位置づけることはできないであろ

う。」Muentzer,AE,314,5-31.(p.147-148.)

ここでミュンツァーは神と被造物との在り方を正しく理解するための「神の秩序」と「神の我々への所有と我々の被造物への所有」という二つの所有関係が「聖書の始め」[27]すなわち創世記第1章-28の正しい理解から与えられるといっているわけであるが，R. SchwarzはここからミュンツァーのOrdnung概念は，ミュンツァーの創世記第1章-28の解釈とそれに基づいた，人間の二つの所有関係への示唆から解明されるとするのである。ミュンツァーの創世記第1章-28の理解に係わるOrdnung概念に対する考慮はH. -J. Goertzにおいてもみられるわけであるが，R. Schwarzはこれを－中世神秘主義の範疇で理解するH. -J. Goertzとは異なり－中世における千年王国的な社会変革観の基礎となっていたスコラ的な「原初」の所有関係－創世記第1章-28から導かれた社会状態[28]－に対する考え方との類似性において捉らえようとするのである。

中世の神学者アレクサンデル・ハレシウス（Alexander Halesius,１１８５－１２４５）によれば，「原初」の状態においては次の二つの原則が支配していた。一つは万物の共有の原則（communis omnium possessio）であり，今一つは全ての人間に共通の自由（omnium una libertas）の原則である。前者は財の社会的な共有の要求であり，人間の他の被造物への所有関係に係わるものであるが，後者は神の法（ius divinum）に相反する人間の法（ius humanum）による支配の存在しないことを意味しており，これは人間の他人に対する所有・支配の存在しないことを示している。[29]またこれは人間の「人への畏れ」からの自由における，人間の神のみへの従属関係の実現ということ，すなわち，「神への畏れ」を通じての神との直接的な関係の実現という意味において，神の人間への所有関係を含意するものであるといえよう。

R. Schwarzによれば，中世の神学においてはこのような堕罪以前の「原初」の社会状態が，人間の堕罪の後の時代においてもその実現の可能性を持っていると考えられていたのであり，このような救済状態の歴史内における実現の可能性への期待が中世における千年王国的な変革思想の根拠となっていたというわけである。[30]従って，このような中世における，創世記第1章-28 の解釈に基づく「原初」の社会状態とその歴史内における再実現への期待と言う思想こそがミュンツァーのOrdnung概念を理解する上で最も重要な前提であるとするところにR. Schwarzの主張の力点があるわけである。

しかしながらここで注意しなければならないことがある。[31]それはR. Schwarz自身，自分が注目する「原初」状態における二つの原則のうちの後者（omnium una libertas）が，神の人間への所有関係に直結しているということを認めているということである。この所有関係はミュンツァーの神学においては，まさしく人間の魂の神による所有，すなわち人

間の魂の「正しい所有者（＝verus possossor)」[32]によるその所有という事柄に他ならないのであり，またこのことこそはミュンツァーが常に神秘主義的自己変革の脈絡において主張する彼の神秘主義神学の主要テーマなのである。従ってこの意味においては，R. Schwarzのいうような「原初」の秩序も，個々人の神秘主義的救済過程に根本的に係わっているのである。さらにはこれとならんでR. Schwarzは，ミュンツァーの場合，－H. －J. Goertzの主張と同様に－このような「原初」の社会状態に示されるような秩序が，個々人の神秘主義的自己変革を通じてのみもたらされ得るということを認めているのである。[33]すなわち彼は，創世記第１章-28に示されるような「原初」の秩序を再獲得するための外的社会変革は，個々人の神秘主義的救済過程（＝内的変革）を前提条件としてのみ可能であるということを認めているわけである。このようなR. Schwarzの認識に加えて，またH. －J. Goertz自身も，ミュンツァーのOrdnung概念と創世記第１章-28との係わりを無視してはいないということを考えるならば，ミュンツァーの変革観に対するこの二人の解釈はその基本的構造においてかなり近いものであるともいえよう。

では両者の解釈の相違はどこに存在するのであろうか。それはH. －J. Goertzが，ミュンツァーの秩序概念を－創世記第１章-28に特に深く係わる外的秩序をも－徹底的にその秩序における人間の主観的側面において捉らえているのに対し，R. Schwarzは，これをその社会の客観的・制度的・構造的な側面を強調して捉え直そうとしている点にあるといえよう。すなわち，H. －J. Goertzにおいて，ミュンツァーの来るべき地上の「神の国」は，主に，個々人の神秘主義的救済過程においてのみ開示される人間の主観的な志向の秩序－神のみを魂の所有者とし，被造物（への欲求）をその所有者としないという志向の秩序－の普遍化という観点から語られるのに対し，R. Schwarzの場合において，それは，こういった人間の主観的志向性を具現化した客観的な社会制度的秩序としての局面から注目されるのである。

またこうした両者の相違はミュンツァーの「神の国」をその動的な性質において注目するか，あるいはその静的な性質において注目するのかといった相違であるともいえよう。H. －J. Goertzの場合には，ミュンツァーの「神の国」はとりわけ変革の過程そのものの中に作られていくというその動的性質において捉らえられるのに対し，R. Schwarzの場合には，変革の結果としてもたらされるものとしてのその静的性質においても強調されるわけである。ではこういった「神の国」の両局面はミュンツァーの外的変革観の中でいかなる形で位置付けられていたのであろうか。

２．内的変革の優位性

ミュンツァーの Ordnung 概念及び「神の国」の性格に対するH. -J. Goertz と R.

Schwarz の解釈の相違は，またミュンツァーの外的変革観についてのこの二人の理解の相違点と結び付いているように思われる。つまり，H. －J. Goertzにおいては，外的変革の主観的側面，すなわち，変革の動機あるいは過程という点に強調点がおかれているのに対し，R. Schwarzの解釈においては，外的変革の客観的側面，すなわち，社会の制度的，構造的な変革あるいは，変革の結果としてもたらされる社会的構造という点についても十分な考慮の必要が説かれるわけである。

さて，ミュンツァーの変革観におけるこの外的変革の両側面に対する位置付けを見るとき，我々が感ずることは，ミュンツァーの関心は圧倒的に変革の主観的側面に集中しているということである。すなわち，ミュンツァーの著作と民衆への説教を見る限りにおいて，そこではほとんどR.Schwarzが示唆するような，変革の客観的側面については－少なくとも第一義的には－語られていないということである。彼はほとんどの論文や呼び掛けにおいてまず第一に内的信仰の説明と要求を位置付けており，ここから現在の変革の必然性を導いているのである。このことはまた現在の変革の必然性が，「神のうちなる語り掛け」に基づく真のキリスト教信仰（＝神秘主義的自己変革）に注目してこそ，初めて正しく認識され得るというミュンツァーの考え方(34)を裏付けていると思われる。そしてまた，ミュンツァーは来るべき地上の「神の国」について語るにしても，それを常に主観的な側面において，すなわち，人々の神秘主義的な救済の枠組みの中において語っているのである。すなわち彼は外的社会変革の客観的・制度的な面について，あるいはこの変革によってもたらされるべき結果としての社会構造について，自分自身ではほとんど語らないのである。確かに，ミュンツァーが，その改革の遂行において世俗権力者層に対して為した，ダニエル書第７章-27に基づく「民衆への権力（＝gewalt）の引渡し」の要求は，(35)彼の変革の社会構造的側面，－すなわち，民主主義的な社会制度の要求－を示唆する方向性を持っている。(36)ここに民衆への支配権の委譲，あるいは支配権の担い手の民衆への服従と民衆の彼等の支配へのチェックといった民主主義的要求へのミュンツァーの主張の方向性が見られることは確かである。しかし注意しなければならないのは，この場合にもミュンツァーはこの約束を第一義的にこういった外的社会変革の客観的な側面において人々に訴えているとは考えられないということである。すなわちここで彼にとって最も重要なことは，変革の結果として民衆の民主主義的支配が実現されるということよりも，むしろ人々が神秘主義的自己変革にしたがって背神者へと立ち向かっていくという変革の過程自体なのである。ミュンツァーが「彼等（世俗権力者）が背神者に対して剣を正しく使用しないならば，剣（schwerdt）は彼等から取り上げられるであろう。ダニエル書第７章-27」(37)と語る時，ここにはこの様な彼の関心がよく示されているといえよう。ここでミュンツァーがダニエル書第７章-27に求めているのは世俗権力者から民衆への社会的支配「権力」の

委譲それ自体というよりも，むしろ現在の変革において背神者に対して正しく向けられる「剣」なのである。従ってミュンツァーが「民衆への権力（gewalt）の引渡し」という時，この「権力」は，変革を導く「剣の力（gewalt des schwertz)」(38)と言う意味において強調されているといえよう。すなわち，この約束は彼の神秘主義的神学の根底から語られ，人々に変革の主観的な側面を，すなわち，神秘主義的自己変革とそれのみに忠実な行動的実践（＝内・外の不信仰への戦い）を要求しているのである。ミュンツァーにとって「民衆」とは「真の信仰に向かう者」を意味しているのであって，第一義的に社会的・階級的な意味での民衆を意味するものとは考えられないのであり，従って，彼のいう「民衆の支配」とは，まさに「キリスト（＝頭)」に従う「真の信仰者（＝肢体）の支配」なのであり，これは真の信仰（＝主観的秩序）の支配の拡大過程に他ならないのである。従ってそこでは社会的・制度的な意味における民主主義的制度（＝客観的秩序）実現はそれ自体独自の価値を持つものとして問題とされはしないのである。

また先程引用した一節における「人間（我々）の被造物に対する所有」ということについても同様のことがいえるわけである。ここで彼は決して財の共有といった社会構造的なあるいは社会制度的な事柄を第一に訴えているわけではないのである。(39)この一節の前後の文脈から考えるならば，彼はこの一節において，現在の堕落した社会体制の中でその堕落の根源としてこの既存の社会を維持している人々，とりわけ，「背神の聖職者達」の被造物志向及びこの志向と信仰とを両立させようとする試みを批判しているのであり，また彼等のこの被造物志向に添った聖書解釈を攻撃しているのである。(40)従って，ここで彼が創世記第１章-28に基づいて第一に要求しているのは，まさに人々個々人における主観的な意味での神の秩序と二つの所有関係の実現（あるいはその普遍的実現）であると考えられるべきであろう。すなわちそれは「被造物の悪巧み（多様)」と「神の純一」との区別（＝不両立）の理解であり，(41)またこのような認識に基づいて，前者に基づく被造物的欲求を魂の所有者とすること無く，後者のみをその正しい所有者として受け入れるという人間の主観的な秩序に他ならないのである。この一節においてもミュンツァーにとって最も問題であるのは，人々のための被造物の解放（＝社会的・客観的側面）ではなく，人々の被造物からの解放（＝人間的・主観的側面）なのである。

以上のようにミュンツァーの外的変革観の強調点は一貫して圧倒的に人々自身の神秘主義的自己変革とその普遍化という，－H. －J. Goertzの主張するような－変革の主観的側面（＝変革の動機・過程）に集中しているといえよう。従って結局のところ，－R. Schwarzが中世において千年王国的期待の基盤になっていたというような－創世記第１章-28に基づいた「原初」の二つの所有関係の再実現という期待は，社会におけるその客観的・制度的な実現の期待という意味においては，－たとえそれが現在における変革に必然的

に伴う結果としてある程度前提的に想定されていたとしてもーミュンツァーの変革思想の中ではほとんど二次的な意味しか持ち得ないといえよう。ましてや，外的社会変革を個々人の内的自己変革よりも優先し，内的変革の条件としようとする考え方はミュンツァーには見られないのである。

3．ミュンツァーの思想における根本的問題点

しかし，いかにミュンツァーが社会変革をその主観的側面を優先的に強調して考えているとしても，ミュンツァーの変革思想全体を見るとき，そこにはまた，彼に外的変革における客観的側面への考慮を不可避のものとする方向性が含まれているように思われる。というのも彼はこういった外的変革を歴史社会の変革として考えたからである。そもそもミュンツァーの神学において人間の内面における問題とその外的社会状況における問題とは切り離して論じ得るべきものとしては考えられていなかった。彼の社会の堕落的状況に対する批判は常に現在の人々の内面における堕落的状況との即応的関係において導かれていたといえよう。彼においては，人々の内面における毒麦（＝不信仰）の成長と現在の社会における毒麦（＝背神の人々）の支配とは同一の事柄であった。(42)従ってまた内的変革と外的変革も互いに即応するものでなければならなかった。それゆえに彼の人々に対する神秘主義的自己変革の要求は，彼等に同時に外的な状況の変革を要求するものであったといえよう。すなわち，内面における，自己の内なる不信仰の除去と真の信仰の成長は同時に，外面における，外なる不信仰（＝背神者）の除去と真の信仰（＝新しい使徒的教会）の成長を要求するものであったのである。しかしここに問題があるのである。すなわちこのようにミュンツァーは外的状況の変革の必然性を認めながらも，これを全く内的信仰のモチーフから構想しているということである。しかしながらこれに対して，こういった外的社会変革の構想は，ミュンツァーがそれを一つの歴史社会の変革として構想するかぎり，その客観的な側面すなわち社会構造的・社会制度的な側面への考慮を要求するのである。ここにミュンツァーの思想はいわばひとつの根本的な矛盾を内包しているのである。それは，こういった外的変革の客観的な面への考慮が彼の思想のもう一方の方向性（＝外的変革の主観的な側面）に矛盾するような性格を本来的に持っているということである。すなわち，客観的な側面における社会変革は，実際には政治的・経済的社会関係の変革であり，従って現実の世俗的社会関係の変革に他ならない。この意味でこういった変革はある程度世俗的価値を積極的に是認した上でのその変革あるいは調整であるといえよう。しかしこれに対し一切の世俗的価値（＝被造物志向）を拒絶しようとするミュンツァーの神学における要求は，こういった社会変革の世俗的価値を許すことはできないのである。すなわち社会的変革の客観的な側面への積極的価値付けは，その主観的な側面におけるミュ

ンツァーの変革観と矛盾するのである。前者は世俗それ自体に対するある程度の価値付けをその前提として求めるのに対し，後者は一切の世俗を拒否し，消滅しようとするのである。前者は「被造物をめぐる」社会関係への考慮を要求するが，後者は「被造物をめぐる」関心それ自体を拒否するのである。結局この矛盾は，ミュンツァーの変革観の持つ二つの方向性の矛盾であるといえよう。一つは世俗拒絶の方向性あり，今一つは世俗改革の方向性である。すなわち，一方においてミュンツァーは，外的変革を主観的側面においてのみ構想するが，他方において彼はこれを歴史社会において実現しようとするのである。後者の方向性はミュンツァーを現実の歴史社会の変革へと急き立てるが，しかし現実の変革において問題とせざるを得ない世俗それ自体に対する価値付けを前者の方向性が拒むのである。

H. －J. Goertzもこのようなミュンツァーの思想における矛盾を指摘している。彼はこういった矛盾がミュンツァーの神学における「神秘主義的根底の中に存在していた」(43)と主張し，さらに彼はこのような矛盾をミュンツァーの思想及び行動における「非現実化」の根本的な原因として注目するのである。(44)すなわち，ミュンツァーの神学は「世俗と神の国を＜内的秩序（innere Ordnung）＞の中に限定してしまうことでそれらの現実的な形を見失ってしまっている」のであり，従って，ミュンツァーは「新しい民主主義的－社会主義的社会を革命（＝農民の解放）を手段として実現しよう」と民衆に呼び掛けることも，また「既存の社会の完全な消滅によって，もはやいかなる支配（と自治でさえ）も存在しない神の国への移行」を予言することもできなかったのである。(45)

確かにH. －J. Goertzのいうようにミュンツァーの神学の神秘主義的根底に存在していた二つの方向性がこのような矛盾あるいは非現実化の原因になっていたということはこれまでも述べてきた通り明らかであろう。しかしまたそれゆえに，我々は，このような矛盾が，我々がこの考察の最初において注目したようなミュンツァーの神秘主義的自己変革の教説をその中核とする能動的な千年王国論的変革思想に対してこそ，その根本的な問題点として立ち現れるものであるということに注目せざるを得ないのである。というのも，千年王国論的変革思想において，「神の国」が，もしも，超歴史社会的な特徴をもって，全く現在の歴史社会を超越した性格の楽園的王国として想定される場合には，すなわち，受動的な古典的千年王国論(46)におけるように，キリストの再臨によって，突然に天から与えられるような，もはや饑餓も，肉体的な死をも存在しないような楽園として考えられる場合には，このような矛盾は解消されてしまうであろうし，また反対に「神の国」が全く世俗的な意味における社会・経済的，あるいは，精神的進歩（例えば，人間の社会的諸関係，あるいは，理性における進歩）として考えられる場合においてもこのような矛盾は問題とならないであろうからである。これらの変革観と違って，ミュンツァーの「神の国」が，

歴史上の最終的な一つの段階，あるいは，一つの時代として－従って，人間自身の変革により実現さるべき一つの歴史社会として－想定されながらも，しかしそれが，世俗的価値を厳しく拒絶する真の信仰（＝内的変革）の普遍化として語られるところにこそ，このような矛盾が生ずるのである。

また，こういったことへの注目は，これまでのミュンツァー解釈の傾向とその問題点を考える上での一つの重要な視点となるといえよう。すなわち，ミュンツァーの変革思想を，いま述べたような古典的千年王国論に引き付けて理解する場合にも，そしてまた，近代的・合理的革命に解消してしまう場合においても，ミュンツァーの神学におけるこの根本的な矛盾は見落とされてしまうのである。

この様な矛盾・対立は，多かれ少なかれ，社会の中に宗教的なものを実現しようと考える運動には不可避の問題であるかもしれない。これは，宗教的志向と世俗的志向との根本的な対立なのであり，此岸の中に暮らしながら，彼岸のものを求める人間存在にとっての宿命的な矛盾であろう。(47)しかし我々はこの矛盾がミュンツァーの変革思想に対して，その能動的な千年王国論としての性格のゆえに，特に強烈な形において立ち現れていることに注目したいのである。

さて，このようなミュンツァーの神学における根本的な矛盾は，無論，その外的変革観が－理論上のみにおいてではなく，実践的なものとして－現実の社会的状況の中に引き込まれるときに，具体的な形において現れることになる。すなわちこの矛盾は，ドイツ農民戦争の中において，ミュンツァーと農民達との間におけるひとつの溝として現れたと考えられるのである。この溝とは，ひたすら個々人の神秘主義的救済とキリスト教会の変革を求めるミュンツァーと現実の世俗的な社会関係の中に生きその変革を求める農民達との間の変革意識における溝に他ならない。(48)ミュンツァーの変革活動が農民戦争全体の流れから孤立し，急進化していく過程(49)の根底には，こういった彼と農民達との間における意識の溝が一つの重大な要因として横たわっていたと考えられるが，この過程に対する考察については機会を改めて行いたい。

（注）

本論文でのミュンツァーの論文・手紙・説教の引用は，全て，Thomas Muentzer, Schriften und Briefe, Kritische Gesamtausgabe, unter Mitalbeit von Paul Kirn herausgegeben von Guenter Franz, Guetersloh, 1968からのものである。既に邦訳のある部分についてはそのページを（　）内に示したが，訳文は上記の原典からこの邦訳を参考としながら私が訳したものであり，必ずしも邦訳に一致するものではない。

略号

Das prager Manifest,1521 → PM 『プラハ・マニフェスト』

Ordnung und Berechnung des Deutschen Amtes zu Allstedt,1524

『アルシュテットのドイツ語礼拝・秩序と解説』

Deutsch-evangelische Messe,Vorrede ins Buch dieser Lobgesaeng,1524

→Vorrede1『ドイツ語福音ミサへの序文』(その1)

Deutsch-evangelische Messe,Vorrede,1524

→Vorrede2『ドイツ語福音ミサへの序文』(その2)

Von den gedichteten Glauben,1524 → GG 『でっち上げの信仰について』

Protestation oder Erbietung,1524 → PE 『信仰の表明あるいは提言』

Auselegung des anderen Unterschieds Danielis,1524 → AD 『ダニエル書第2章の講解』

Ausgedruckte Entbloessung,1524 → AE 『まやかしの信仰のあからさまな暴露』

Hochverursachte Schutzrede,1524 → HS 『きわめてやむを得ざる弁護論』

Briefwechsel → Br.手紙

上記9文書と手紙の一部には邦訳有り(『宗教改革著作集』第7巻 徳善義和編 教文館1985)

(1) この時期の宗教改革急進派の全般的な研究としては, G. H. Williams, The Radical Reformation, London, 1962が代表的であり, また研究史については『宗教改革急進派』倉塚平他編 ヨルダン社1972の「序説」(倉塚平 著)が参考となる。

(2) F. Engels, Deutsch Bauernkrieg, Dietz Verlag, Berlin, 1951

(3) H. Boehmer, T. Muentzer und das juengste deutschland, in Gesammelte Aufsaetze, Gotha, 1927, S. 209ff.

(4) ミュンツァーの終末論的一黙示録的な預言者としての性格に注目する研究としては,

W. Elliger, Aussenseiter der Reformation : T. Muentzer, Goettingen, 1975 C. Hinrichs, Luther u. Muentzer, Berlin 1952

F. Lau, Die prophetische Apokalyptik T. Muentzers u. Luthers Absage an die Bauernrevolution, (1955, Berlin) in Thomas Muentzer, hrsg. von A. Friesen, H. −J. Goertz Darmstadt, 1978 (以下TMに略記)

W. Stoesz, At the foundations of Anabaptism : A study of T. Muentzer, Hans Denk and Hans Hut, New York, 1967

G. Maron, T. Muentzer als Theologie des Gerichts, (1972) in TM

R. Schwarz, Die apokalyptische Theologie T. Muentzers und der Taboriten, Thuebingen 1977 (以下R. Schwarzに略記)

(5) この考察で主に扱うミュンツァー研究者の一人, H. −J. GoertzはDer Mystiker mit dem

Hammer（以下G－1に略記）でこの様なミュンツァー解釈の問題点について指摘している。また彼は今年に出版された彼の著作においてもこの点に注目している。H. －J. Goertz, Thomas Muentzer, Mystiker・Apokalyptike・Revolutioner, C. H. Beck, 1989, S. 160ff.
また彼のこの点への注目については他にH. －J. Goertz, Schwerpunkt der neuen Muentzer－forschung, (1976) in TM, S. 500ff.を参照。

（6） このように再臨信仰を持つ運動及び神学者としては，まず，2世紀におけるモンタヌス主義の運動，及び，この運動に参加した西方の神学者テルトリアヌス，あるいは，使徒教父パピアス（A. D. 1c），イレナエウス（A. D. 2c），ラクタンティウス（A. D. 4c）などがあげられる。また，15世紀におけるフス派運動の急進的一派であるタボル派，そして16世紀における再洗礼派の中にもこの様な信仰が見られる。（N. Cohn, Persuit of Millennium, 1972, New York p. 25ff. ,p. 205ff. p. 252ff. ; Tuveson, Millennium and Utopia, 1964 New York p. 10ff.）

このうちタボル派については，千年王国論に基づくその過激な破壊活動の展開という点において，ミュンツァーの変革活動との類似性が，これまでのミュンツァー研究においてしばしば強調されてきている。（N. Cohn, op. sit. p. 235ff.またミュンツァー研究者ではG. Maron, a. a. O. , S. 358f. , S. 368 ; F . Lau, a. a. O. , S . 6f. ;M. M. Smirin, Die Volksreformation des T. Muentzer und der grosse Bauernkrieg, Berlin, 1952, S. 276f.）しかしながら，タボル派についてはその多様な変革観を示す資料があり，そこには，人々に革命的な破壊活動が要求されながらも，最終的に千年王国の開始に際してキリスト自身の再臨を期待するものが含まれている。従って，この場合には，人々の活動が，ミュンツァーの変革思想におけるのと同様の能動的な歴史変革意識に支えられているとは考え難いのであり，この意味から，ミュンツァーとタボル派の変革思想及びその関係の考察においては，神の審判としての背神者に対する破壊活動という点における両者の共通性とともに，また，両者の相違点も十分に注目される必要があると考えられる。タボル派の変革観の多様性，及び，これとミュンツァーの変革観との相違点を考えるためには，特にR. Schwarzの前掲書が参考となろう。

（7） Muentzer, PM, 504, 12ff.また1524年7月に行われた御前説教『ダニエル書第2章の講解』において彼はダニエル書第2章の解釈を通じて現在の変革の歴史的な必然性を説いている。特にMuentzer, AD, 255, 10ff.

（8） ミュンツァーは彼の中心的な信仰思想であるこの神秘主義的神学思想をドイツ神秘主義，特にタウラー（Johannes tauler, 1300頃-1361）の影響下に確立したと考えられる。（彼はボイディッツ滞在期にタウラーの著作を読んでいたと思われる。Muentzer, Br. 356, Die Nonne Ursula an Muentzer1520, 356.）

ドイツ神秘主義における神と人間とを直接的に結び付ける根拠としての「魂の根底」という概念が，ミュンツァーの創造論及びキリスト論に対してその基礎的要素として密接に結び付いていることはほぼ明らかであると考えられる。人間が本来的に「神の生きた語り掛け」すなわち，聖霊を通じた神の直接的な作用を受け止め，これに基づいて信仰を実現するために創造さ

れたということ（Muentzer, AD, 252, 27ff. ,AE, 292, 33ff.）　，そして「魂の根底」の開示において神の子キリストと「似た形」とされるということ（Muentzer, AD, 318ff.）　，これらはまさにミュンツァーの神学の中心的な主題を成しているのであり，また，その変革思想全体の根本的な基盤に他ならないのである。特にドイツ神秘主義とミュンツァーの神秘主義的信仰思想との関係に注目する研究者としては，H. －J. Goertz Innere und aussere Ordnung in der Theologie Thomas Muentzers, Leiden, 1967 （以下G－2に略記） H. －J. Goertz, G－1, G. Born, Geist, Wissen und Bildung bei Thomas Muentzer und Valentin Icklsamer, Erlangen, 1952, S. Ozment, Mysticism and Dissent, London, 1973p. 1－45.

またここでドイツ神秘主義の受容に関連して，ミュンツァーへのルターの影響が問題となろう。この点について田中真造（「宗教改革初期のトーマス・ミュンツァー」広島商科大学『論集』8巻1968,『トーマス・ミュンツァー～革命の神学とその周辺』ミネルヴァ書房1983に収録）は，かなり早い時期からのミュンツァーの神学のルターの神学との異質性を認めている。彼は，ミュンツァーのルター派としての活動時期における彼の思想がルターと異質のものであったにも拘らず，これがミュンツァーに自覚されなかったことを指摘し，ミュンツァーの思想形成過程とそれに対応する彼の主観的な自覚過程とのズレに注目している。（p.27 以下）また，S. Ozmentも，ルターの神学やミュンツァーがツヴィカウで出会ったシュトルヒの聖霊主義的思想はミュンツァー自身の思想にとっての補助的なものであり，「新しくそこに持ち込まれた内容ではない」として，ミュンツァーの思想の本来的な独自性を指摘している。（op. sit.,p. 72）H. －J. Goertzも，これらの思想に対するミュンツァーの思想形成の独自性を主張し，ミュンツァーの思想の根源をドイツ神秘主義の中に見出だしている。（G－1, S. 411ff.）

（9） ミュンツァーは現在の変革が，背神者達との「戦い」の活動と真のキリスト教信仰を拡大する「説教」の活動とにおいて導かれると考えていたと思われる。ミュンツァーは前者の活動に「エリヤのような厳しさ」（Muentzer, PM, 504, 24ff.）を，そして後者の活動に「ヨハネのような慈しみ深さ」（Muentzer, AE, 296, 21ff.）を求めている。

また，A. Friesenは，変革を人間の能動的な活動自体に期待する点において，ミュンツァーの変革思想と中世の聖書学者ヨアキム（Joachim of Fiore, 1135－1202）の歴史神学との類似性に注目している。　A. Friesen, Thomas Muentzer und das alte Testament (1973) in TM. S. 395－398.この点については他に，M. Reeves, Joachim of Fiore and the Prophetic Future, London 1976, p.141f. ; M. Reeves, The Influence of Prophecy in the Later Middle Ages,　A Study in Joachimism, p. 490f.を参照。

（10） 以上のような区別のうち，特に，古典的な千年王国論とミュンツァーの能動的な千年王国論についての区別は，一般に知られているPremillennialismとPostmillennialismという区分と非常に密接な関係にあると考えられる。前者は，古典的なキリスト教初期の千年王国論に近いものであり，キリスト本人の再臨による千年王国の開始と，またキリスト本人の地上での支配を期待するものである。これに対し後者は，劇的で突然の千年王国の開始を期待せず，福音の説教に

よって，人々の心の中におけるキリストの支配が普遍化されていくところに千年王国の実現を考えるものであり，この場合にキリスト本人の再臨は，この千年王国の終了時に，従って歴史の終焉時に，全ての義人及び背神者の復活と最後の審判と伴に期待される。この様な性格を見るかぎりでは，Premillennialismと古典的な千年王国論，Postmillennialismとミュンツァーの能動的な千年王国論，のそれぞれの類似性はかなり明確であると思われる。しかしながら，この区別は，主に現代における千年王国論の展開に視点を置いて用いられる傾向が強いと考えられるものであり，この考察での区別との関係については慎重な扱いを要すると言えよう。PremillennialismとPostmillennialismの区別については，M. Erickson, Contemporary Options in Eschatology, A Study of the Millennium, Baker Book House, 1977, p.55－109及びTheologie Realenzyklopaedie, Berlin, New York, 1981, Ⅶ"Chiliasmus " S. 738ff.を参照。

(11) H. －J. Goertz G－1, S. 431－432.

(12) H. －J. Goertz, G－1, S. 430－431.

(13) R. Schwarz, S. 109, 125.

(14) Muentzer, GG, 219, 23－26. (p.51.)「もしモーゼが被造物の悪巧みと神の純一とを，神と被造物に立てられた秩序にしたがって，認識していなかったならば，モーゼはモーゼの神を悪魔であると見なしたであろう。」

Br.61 1524,7/26,425,35-37.「(神は) 神とあらゆる被造物とに立てられた秩序を通じて啓示され得る。」

PM,496,9-12.(p.10.)「私は…博士達がほんの少しでも，神と全ての被造物とに立てられた秩序について語るのを聞いたことがない。」

＝PM-c,505,16-506,1. "nec unicum de larvatis audivi doctoribus, qui ordinem deo et creaturis congenitum in minutulo hiscens apice exposuisset. "

(15) Muentzer, AE, 314,3－10. (p. 147.)「私は，我々キリスト教徒よりも，むしろ異教徒やトルコ人やユダヤ人に対して，非常に言葉少なく，神と神の秩序について教え，また神の我々に対する所有と我々の被造物に対する所有について教えたい。」

PM－a, 11－13.「私は聖書学者達の一人からでも神があらゆる被造物の中に立てた秩序についてほんの少しの言葉をもってしても語られるのを聞いたことがない。」

(16) ミュンツァーのOrdnung概念に対するH. －J. Goertzの解釈については，特に，H. －J. Goertz, G－1, S. 416－418.及びH. －J. Goertz, G－2, S. 39－45.において論じられている。ここで扱った彼の主張は特に前者の論文G－1に基づくものである。

(17) H. －J. Goert, G－1, S. 416－418.におけるこの主張は，彼がミュンツァー解釈において，ミュンツァーのOrdnung観と創世記第1章－28との関係を見逃しているという批判に対し，自己の立場を補強する目的において為したものである。

(18) Thologia Deutsch, hrsg. v. H. Mandel, Leipzig, 1908, S. 103.

(19) Theologia Deutsch, S. 69.

(20) Theologia Deutsch, S. 71ff.

(21) Muentzer, Br. 61, 1524, 7／26, 425, 35－37.ミュンツァーは唯一の信仰の根拠を神の直接の語り掛けに求め，聖書の文字や自然からの「自然の光」（＝自然悟性）にしたがった神あるいは信仰の理解を否定するが，このようなことは「変革の時」の認識についても当てはまる。すなわち，真の信仰を認識できないものには，また現在のキリスト教会の変革の必然性をも認識できないのである。このような観点から，ミュンツァーはルター派を批判している。Muentzer, Br. 31, 1522, 3／27, 380, 6－12.「しかし私は，この点において君たちを非難する。すなわち，君達はものを言わぬ神を拝み，また，無知のゆえに・・・・・主の知識が最も十分に開示される将来の教会をも否定するのである。君達のこの誤りは，一重に君達の無知に起因している。聖書をみよ。・・・・・『人はパンにおいてのみ生きるのではなく，神の口より生ずる言葉の全てにおいて生きるのである。』（第５モーゼ書第８章の３，マタイ第４章の４，ルカ第４章の４）聖書の外なる文字からでなく，神の生きた口から生ずる言葉に注目せよ。」

またH. －J. Goertzは，この点に関して，ハンス・フートの「自然の福音」を念頭に置いて，ミュンツァーのOrdnung概念を，自然（＝被造物）における神あるいはOrdnung認識に結び付けるG. Bornを批判している(H. －J. Goertz, G－1, S. 418, S. 440 A. 54. 55, G－2, s. 40－42.)

(22) H. －J. Goertz, G－1, S. 417.

(23) H. －J. Goertz, G－1, S. 418.

(24) ミュンツァーのOrdnung概念に対するR. Schwarzの解釈についてはR. Schwarz, S. 87－126.において論じられている。

(25) R. Schwarz, S. 109.

(26) R. Schwarz, S. 114.

(27) この“zum Anfang der biblien“についてR. Schwarzは，これをG. Franz (314, A. 292a.)のように“zum anfassen der biblien“と解釈すべきでないと主張する。田中氏による邦訳はG. Franzに倣ってこれを「聖書を正しく理解するように」と訳しているが，ここではR. Schwarzの解釈を明確にする必要から，彼の主張にしたがって「聖書の始め」と訳出した。

(28) R. Schwarz, S. 100－108.

(29) Alexander Halesius, Summa Theologica Ⅲ n. 241－258. (R. Schwarz, S. 106 A. 67.)

(30) R. Schwarz, S. 106－108.

(31) R. Schwarz, S. 102－103, S. 116－118, 125.

(32) Muentzer, Br. 31, 1522, 3／27, 379－382.ここでミュンツァーは魂の「真の所有者」を聖霊に，またその「誤った所有者（falsus possessor)」を「下等な情欲（delectationes inferiores)」に結び付けている。(Muentzer, PM－b, 497 22, PM－c, 506 24－25.)

(33) R. Schwarz, S. 118－119, 122－123, 125.

(34) Muentzer, Br. 55, 1524, 7／15, 411, 24－36.「そして正しい畏れからあなた方はあなた方が何を為すべきかを，そして何が為されるべきかを，すなわち神が正しく命じていることを認識し，

学ぶであろう。…というのも神の認識の始まりは神の畏れだからである。…それゆえにあなた方は聖霊が神の畏れのみをあなた方に教えるように，日夜心ををあげて神を求め，嘆願し，苦しむべきである。というのももしあなた方がこの正しい神の畏れを持たないならばあなた方はどんなにわずかな試練をも耐えられないであろうからである。しかしこの神の畏れをあなたがたが持つならばあなた方はあらゆる暴君に戦いを挑むであろう。そして彼等は言い様のないほどに悲嘆にくれて恥じ入ることであろう。今や神の畏れは，敬虔な人々が神の意志のためにあらゆる欲求から空となって立ち上がり，彼等のからだ，福祉，家屋敷，子供，妻，父，母そしてこの世の全てのものを捨て去るべきことを教えているのである。」

AD, 255, 15－18, 23－26. (p.102－103.)「…ここで神はこの世の変革をダニエル書と同様にはっきりと語っている。神はこの変革を終わりの日々に行い，自分の名が正しく称えられるようにしようとしている。…神の霊が最近多くのの選ばれた敬虔な人々に，重大で必然的な将来の変革が全く避けられ得ないものであり，また実行されねばならないということを啓示しているということは本当であり，私も確信している。」

Muentzer, Br. 31, 1522, 3／27, 380, 6－12 →(21)

(35) Muentzer, Br. 57, 1524, 7／22, 417.「あなた方はもはや他の代官達の意に添うようなやり方に従って行動するべきではない。というのも彼等がキリスト教の信仰について全く何ものも持ってはいないということが明らかであるからである。従って，彼等の権力は終わりを迎えているのであり，権力は近いうちに哀れな民衆達に与えられるであろう。(“Do hat yhr gewalt auch eyn ende, sye wyrt in kurzer zeyt dem gemeinen volk gegeben werden.“)」

Br.91 1525,7/13,471,15-22.「できるかぎり全力を尽くして，民衆の力と大砲でもって我々を助けてほしい。神自身がエゼキエル書第34章で命じていることを我々が果たすために。そこで神は次のようにいっている。『私はあなた方を，暴君の圧制においてあなた方を苦しめる全てのものから解放しよう。私は野獣をあなたがたの国から追い払おう。』さらに神は同じ預言書の第39章においてこう語っている。『あなたがた天の鳥は来て，君主の肉を食べ，あなた方野獣は大いなる犠牲の血を飲むのである。』そしてダニエル書第７章でこう語っている。権力は哀れな民衆に与えられるであろう。(“dye gewalt sol gegeben werden dem gemeinen volk.“)」

尚，ミュンツァーが最初から世俗権力者層の一切を，現在の変革の中で消極的な役割を担うものとして理解し，革命的変革を考えていたとは考えられない。1524年７月の御前説教で彼はまだ，ザクセン選帝侯権力が現在の変革において「刈り入れの天使」として積極的に使命を果たし，変革がより平和的に導かれることを期待している。(Muentzer, AD, 258, 12.) また，この様なミュンツァーの世俗権力者への評価の変化についてはC. Hinrichs, a. a. O., 111ff.を参照。

(36) Muentzer, HS, 328, 26－329, 9. (p. 162.)「ルターは一つのことのみを述べ，全く重要なことは黙っている。それは私が君主達の前ではっきりと，全体のものが解釈の鍵と同様に剣の力を持っていると言ったことであり，また君主達は全く剣の支配者でなく，剣の僕であり，全く自分達に都合の良いよう振舞うのでなく，…正しく振舞わねばならないと言ったことである。それ

ゆえにまた，神の法にしたがって正しい裁きが行われるときには，古き良き慣習にしたがって民衆はその場に居なくてはならないのである。何故か？もし世俗権力者が誤った判断を行おうとしようとしても周りにいるキリスト者がそれを拒否し許さないがためである。というのも神は無実の血に対しての釈明を望むからである。」

H. —J. Goertzもミュンツァーのこういった民主主義的志向に注目しているが，彼はこういった社会制度的変革が，ミュンツァーの場合，それ自体において独立した価値を持つもつものとしては考えられておらず，常に内的信仰概念に拘束されているという点において，ここにも，ミュンツァーの思想における内的Ordnungの優位を見ている（G—1, S. 422.）

(37) Muentzer, AD, 261, 18—19. (p. 110.)

(38) Muentzer, HS, 328, 28. (p. 162.)

(39) ヘルトルンゲン城における「拷問によるミュンツァーの自供」の中には，アルシュテット同盟の同盟箇条は「万物は共有である」という内容であったという自供がある。(Muentzer, Bekenntnis T .Muentzers, 1525, 5／16, 548, 15.) しかし，彼自身の書いた文書の全体を見るかぎり，このことを彼が第一義的に目指したとは考えられない。またこのことについてR. Schwarzは，ミュンツァーは財の共有といったことを強調していないが，これは中世の千年王国的伝統からすれば当然の期待であるとし，上記の拷問による自供の内容は不思議なものではないと主張している。(S. 103f.)

(40) Muentzer, AE, 312, 30—313, 31. (p. 146—147.)「今日のキリスト教会の人々ほど自分たちの律法を惨めに破壊し，呪い，辱めている民族はない。そしてとりわけ，聖書の文字のみに拠って立つ悪人達が，第一にこの状態の重大な根源となっている。…だから，隅々まで，利息を貪るものと裏切り者で一杯である。(詩篇55篇) …彼等（＝君主達）に福音を説く，彼等の聖職者である，あの信仰深い人達といえば，莫大な財産を持つ老婦人と結婚したりする。というのも，彼等は，自分達が最終的にはパンを求めねばならないと気づかっているからである。」

(41) Muentzer, GG. 219, 23—26.→ (14)。

この一節は明かに主観的な問題，すなわち真の信仰根拠の区別・認識の問題を言っていると考えられるが，この文の欄外においてもミュンツァーは創世記第１章を指示している。

また，ここで問題としているミュンツァーの一節を理解するのに役立つものとして，ミュンツァーの次の文章が考えられる。

Muentzer, Br. 64, 1524, 8／3, 430, 29—431, 3.「私は，ルターと同じキリスト教信仰をではなく，この地上のあらゆる選ばれた人々の心の中において同一の形であるキリスト教信仰を説教したいのである（詩篇67篇)。たとえトルコ人に生まれついたものであっても，使徒行伝第10章（44—47）でコルネリオについて書かれているのと同じような信仰の根源を持ち得るのである。この信仰の根源とは聖霊の働き掛けに他ならない。」

ここでミュンツァーが説きたいと言っていることは，聖書の文字からの被造物的判断に基づくと彼が考えるルターの信仰と，聖霊の直接的な働き掛けに基づく信仰との区別であり，これ

はまた「被造物の悪巧み」と「神の純一」との区別に他ならない。常にミュンツァーが第一に説いているのは，このような真の信仰の根拠の認識とそれに基づく，神のみに拠って立つ真の信仰と被造物志向的信仰との区別であり。従って，ここで問題としている一節も，創世記第1章－28に関わるOrdnungとして，このような信仰における主観的なOrdnungのことを第一に主張していると考えるべきであろう。

(42) ミュンツァーにおいて「毒麦（“unkraut”）」の成長（マタイ第13章24-31,36-43）は，人々の心の中における「不信仰」(Muentzer, PE, 235, 14.）の成長とキリスト教会全体の中における「背神者」(Muentzer, PE, 230, 21.）の支配とのどちらを示す場合にも用いられている。

(43) H. －J. Goertz, G－1, S. 429.

(44) H. －J. Goertz, G－1, S. 428－429.「（ミュンツァーにおいて）社会的現実，すなわち「世俗」（＝die “Welt”）は罪の標しとしてのみ理解されのである。つまりそれは，まさに罪として認識されるのであって，決して，そこにおいて，またその構造の中において，神に仕え，信仰を個人的・社会的に証明するために人間に与えられ，任された生活領域としては認識されないのである。」

このようなH. －J. Goertzの理解は，ミュンツァーの変革思想における信仰と世俗（＝不信仰）との緊張関係をよく示していると考えられる。そして，この様な緊張関係がミュンツァーの思想における根本的な矛盾点に結合しているわけである。これに対してルターは，二王国論的な立場から，霊的なキリストの王国と世俗の王国とを峻別し，人間の実存を内面のキリスト教的人格と世俗社会における世俗的人格との両立に見ており，上記のような矛盾は，本来的に解消されていると考えられよう。彼にとって－ミュンツァーとは全く反対に－人間の内面の変革は外的社会変革とは本来的に別のものなのであり，そもそも社会秩序の革命的な変革が宗教的な衝動から要求されることはないのである。

これに対して，世俗の社会を「神の法」を導き糸としてキリスト教的なものに変革していこうとするツヴィングリにとっては，ルターに比べれば上記の矛盾が問題となり得るといえよう。しかしながら，彼においては，世俗拒否的な方向性が，世俗変革的な方向性に対して，矛盾するというよりは一致していると考えられるのである。彼にとっては政治社会的な意味における共同体原理自体が同時に宗教的な価値を実現し得るものであったのである。

(45) H. －J. Goertz, G－1, S. 432.

(46) 古典的千年王国論は「神の国」の地上への到来を期待している点において本来的に2つの方向性を持つものといえるかもしれない。しかしこの場合には，この「神の国」の全くの超歴史的性格とその変革の受動的・奇跡的・突発的性格（＝パルーシアの期待）がこの二つの方向性の緊張関係を解消してしまっていると考えられる。すなわち，奇跡的なキリスト本人の再臨による突発的な世俗の破壊と消滅に対する受動的な期待が人間の力による能動的・継続的な世俗変革の方向性を消去してしまっているのである。

(47) この点に関しては，特に金井新二『「神の国」思想の現代的展開』教文館1982，第三部p.298

以下が参考となる。

(48) ミュンツァーは，フランケンハウゼンでの敗北の後，諸侯側に捕らえられ牢獄に繋がれていた時期に書いた手紙において，この戦いの敗北を「だれもがキリスト教会を正しいものへと改革することよりも，自分の我欲を求めたという事実に相応しい結果」であると理解している。また，この様な理解はミュンツァーがこの時点において自分と農民達との間の変革意識における溝を明確に自覚していたことを示すものであると言えよう。

Muentzer, Br. 94, 1525, 5／17, 473, 20－21 (p.194)

また，この手紙の信憑性をめぐる議論及び解釈の変遷については田中真造，前掲書，p.222以下に詳しい。

(49) W. Elliger (T. Muentzer. Leben und Werk, Goettingen, 1975, S. 777－786.)は，テューリンゲン以外の農民戦争に対するミュンツァーの影響を消極的に評価している。

また，H. Boehmer (a. a. O. S. 190－222.)は，農民戦争全体に対してのみでなく，チューリンゲン農民戦争に対しても，ミュンツァーの重要性を否定的に見ている。また，この様な急進化及び孤立化については田中真造，前掲書，p.19以下及びp.123以下が参考となる。

Thomas Műntzer and the Kingdom of God

Takashi Kizuka

Thomas Műntzer, generally known as a radical Protestant refomer, or as being in the left wing of the Reformation, has been understood broadly in two ways in previous studies. In the first place, Marxist-studies have characterized Műntzer as a social-political revolutionary, mainly conforming to the framework given by F. Engels ("Der Deutsche Bauernkrieg"). In contrast to this, in the second place he has also been thought of as an apocalyptic prophet or an enthusiast by church historians of the anti or non-Marxist standpoint.

In my opinion, the difficulty in interpreting Műntzer shown by such a split in the studies concerning him basically results from the specific, that is active, character of his eschatology or historical-theology, which cannot be identified with the traditional (pre-)millennialism typically found in the early church or the apostolic period.

In this paper, through a consideration of Műntzer's view of "Ordnung Gottes", we examine in what kind of fashion he combined the inner transformation of the individual person through the work of the Holy Spirit with the external transformation of the social order through revolutionary acts by "ausserwelten" and what kind of problem or contradiction was contained in the combination of these two elements, which we can also call the combination of mysticism and millennialism.